り溫泉は箱根か熱海に限るやうに思ひます。（五月十六日）

今日は此處を立つて福渡戸のよい宿屋にもう一泊するつもりの處が、大陽に暈が見えるので、明日の天氣が氣になつて東京へ歸ることに極めました。

宿の三階から河原の大柳を寫しました。日があたつて調子がむづかしい、昨夕見た時の方がよかつたやうです。十時頃會津屋を出て、橋の袂の河原へ下り、瀧の下から橋をかけて、新綠の樹を寫しました。綠はいま實に美はしく、梢のあたりは殆ど紅ゐに、まるで秋の紅葉と見まがうやうです。

更に下流にスケツチして、見物がてら歸ることにしました、鹽の湯は景色のよい處で、鹽原に名高い瀧の多くはそこに集まつてゐるさうですが、時間の都合で此次に延しました。

鹽原は數ヶ所に溫泉の分れてゐるためか、町らしい處はありません、宿の可なり立派なのはイキ戸位ひのもので、他は皆都の紳士淑女の御泊りには不充分でせう。

馬車は午後からは無いので、福渡戸から俥に乘りました、僅かの賃錢の相違なら、馬車よりも俥の方が危險もなし、四方が見えてよいと思ひました。老車夫は名所々々に俥を停めて一々說明してくれました。關谷迄の間には大きな景色の處が澤山あつて、鹽原は中々捨てがたい處だと思ひました。

關谷では、茶店に休むで名物の團子も喰べました、よく搗いてあつて田舍にしてはよい味のものです。

關谷あたりの柿の若葉が何ともいへぬ美さで、こゝに泊つて描いてゆかうかとさえ思ひました。

單調の道を西那須野へ一直線に、俥は走りました、此道には車夫も閉口すると申ます、特に夏の炎天には耐えられぬ苦しみであるさうです。

車夫はよくいろ〳〵の話をしました、いまは神にさへ祀られてゐる通庸氏を、三島〳〵と呼ひ捨てにして、其人のことなど何くれとなく物語りしました。

松方の別莊はあの奥だとか、大山は何處だといふ風で華族も元帥も眼中には無いのでした、大臣の月給を其儘使はず、一生涯溜めたとて高の知れてゐるものだ、それに松方など、此處ばかりも三千町歩の大地主だ、どうして金が出來るのかなど、平凡なことを頻りに喋つてゐました。西那須停車場で、二時間も汽車を待つて、夜の十時無事上野へ歸りました。（五月十七日）

銀と靑と

奥村博

白壁に月は光れりいづこともかびの香まよふさみしき夜なるゆら〳〵と水にうつれる提燈の火かげ淋しくなつかしきかな

指の先き冷き玻璃戸の悲しみの沁みるをおぼえ涙ぐまるゝ

故郷の山遠きかな此夕べ我さびしくもハモニカを吹く

ともすれば紫色になやましううつむきがちのおいらんの花

此夕べ蚊帳の靑さに涙ぐむ胸のもだえと海遠鳴りと

チャブ台にこぼれし牛乳の香をかぎて我悲しめり父病める夕